

大イベントでテレビが替わる

電器屋さんで見た時は、それほど大きいと思わなかったのだけれど、いざ家に運ばれて置いてみると、居間に不相応なほどの大きさで「おいおい大丈夫か」と言いたくなってしまった。地デジ対応の薄型テレビの話である。

画面の大きさはこれまでのブラウン管のものより二倍以上はあるだろう。確かわが家の狭い居間に対応する大きさと書いてあった筈だが、ブラウン管当時「もっと離れてみなくちゃ目を痛める」と言われていた事から考えると、隣の部屋まで避難して眺めなければならぬほどの大きさだ。でも、映し出される画面を見て驚いた。画面がしっかりとっていて、きらきらした反射が全くないのだ。しかも色合いの細やかさと鮮やかさは、一体どうした事なのだ。液晶とかプラズマはどんな仕掛けかは知らないが、ブラウン管の時代は、四年後のアナログ放送の終了に前後して消えるのではないか。それよりも、来年の北京オリンピックを機に、薄型テレビは国中に普及するだろう。

私たちがテレビを見ることができるようになったのは昭和三十一年。たった五十年前のことだ。街頭に設置されたテレビに大衆が群がり、「テレビ放映中」と張り紙をした喫茶店が満員になったりした。NHK札幌がテレビ放送を開始した時、道内のテレビ登録台数は一五三八台しか無かったという。嘘みたいな話だ。その頃私は札幌近郊の町に住んでいたのだが、街の有力者の家に一台だけテレビが入り、その家族、町長、小中学校長、駅長などが居間にすわり、ほかは開放された窓から折重なるようにのぞき込んで、大相撲の取組にかん声を上げた覚えがある。

このテレビが飛躍的に普及したのは昭和三十四年の皇太子(現天皇)ご夫妻のご成婚だった。あのパレードを見たいばかりに、争うように受信機が家庭に入り込んだ。確か、私の両親がテレビを手に入れたのもこの時だった。安サラリーマンの父にしては、大事件といたいほどの出費だったはずだ。今回は地上デジタル放送への移行という、技術的にはこの五十年間で最も大きな波が、テレビ界に来るのだが、いつもテレビの変化は国家的・国際的ビッグイベントと密接にかかわっている。そしてテレビの変化はそのまま暮らしの変化にもなっている。